３. 同心円地帯理論と人間生態学

バージェスは「都市の成長」（1925 年）のなかで、有名な同心円地帯理論を提唱。シカゴの都市成長の空間的パターンとシカゴ学派都市社会学の問題関心をわかりやすく示す。

（１）同心円地帯理論

都市の空間的パターンを５重の同心円によって示す。

Ⅰ　中心業務地区（Loop）

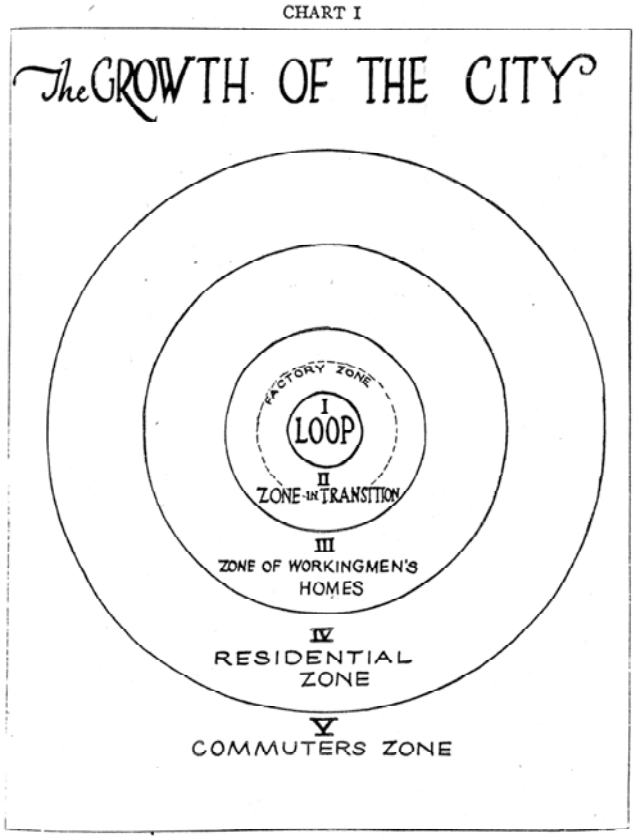
Ⅱ　推移地帯（zone in transition）　軽工業地区、安価で劣悪な住宅地区。

Ⅲ　労働者居住地帯（zone of workingmen's homes）

Ⅳ　住宅地帯（residential zone）　中産階級の住宅地域

Ⅴ　通勤者地帯（commuters　zone）　上流階級の郊外住宅地区、バンガローハウスなど。

http://www.asanet.org/page.ww?name=Ernest+W.+Burgess&section=Presidents



（２）シカゴの同心円構造

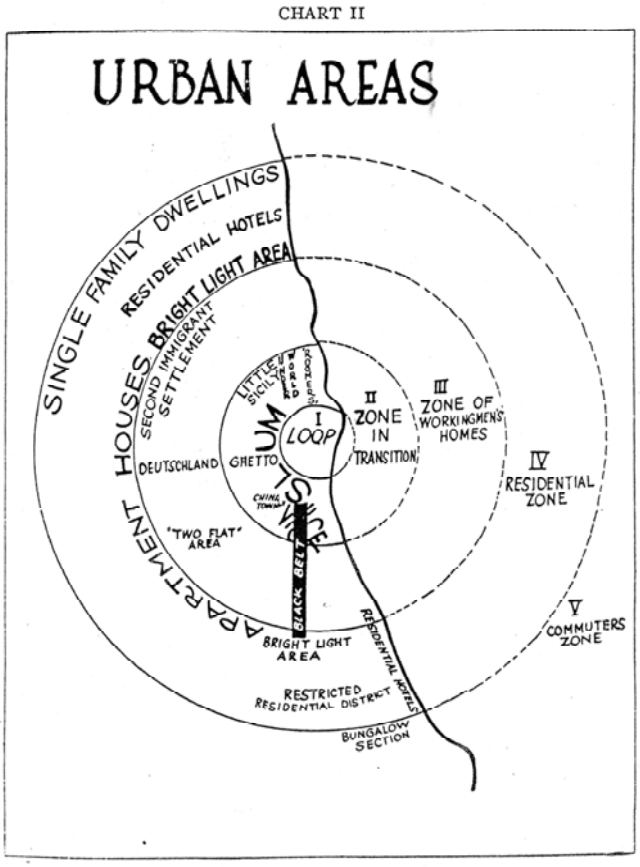
ループ地区：ケーブルカーから高架鉄道へ。摩天楼、百貨店、美術館など。
　　都心の中心業務地区、商業地区。

推移地帯：スラム、下宿屋街、暗黒街、リトルシシリー、ゲットー、チャイナタウン、悪徳地帯、ブラックベルト、グリークタウン、ピルゼン、劇場街リアルト、ラテン街。

労働者居住地帯：移民の第二世代の居住地。
　　ドイチュラント（ユダヤ人街）、２階建て住宅地区

住宅地帯：高級賃貸マンション地区、繁華街、排他的な高級住宅街

通勤者地帯：家族向け一戸建て住宅、居住用ホテル、バンガロー地区。



（３）都市拡大の動態

●社会移動の空間的過程――外へ外へ移動。
　推移地帯→労働者居住地帯→住宅地帯

●都市そのものの拡大過程――同心円自体の拡大。
　住宅地帯→労働者居住地帯→推移地帯→中心業務地区。
　「侵入（invasion）」「継承（succession）」によるコミュニティの変化。

●移民の民族的モザイクから都市分業体系へ
　移民の居住地のモザイクから、中心業務地区によって支配された分業体系へ。

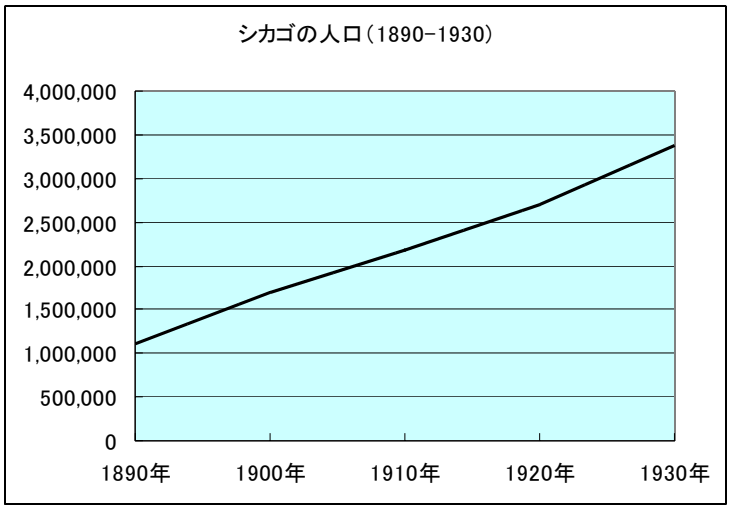
集中化（centralization）――中心業務地区によって各地区が支配されていくこと。
離心化（decentralization）――都市が拡大し、都市機能の諸要素が空間的に分散していくこと。チェーンストアの展開など。

社会解体と再組織化――移民の社会組織の解体と、都市分業体系にもとづく再組織化。
正常な場合、両者は均衡する。都市の拡大が正常な率を超えると、社会解体。

（４）調査方針としての同心円地帯理論
●数量的な測定――人口増加率、年齢・性別構成、流動性の測定（交通量、接触頻度、地価）→ Local Community Research Committee のプロジェクトへ。
●集中的なコミュニティ研究――ゲットーとドイチュラントの比較研究。

（５）人間生態学（Park）
　都市における人間集団の相互依存関係を、植物生態学に類比できる人間の生態学的な過程としてとらえる。

●コミュニティとソサエティの区別
　生態学的コミュニティ――一定の空間的な範囲内における、異質な人びとの競争的相互依存関係（共棲）。侵入、継承（遷移）、支配（優占）、集中化などの空間的過程を記述。
　ソサエティ――コミュニケーションと合意にもとづく道徳的な秩序。
　→不安定な競争的相互依存の状態にある都市から､いかなる道徳的秩序が生まれるのか。これを探求することが、シカゴ学派都市社会学の初発の問題関心であった。

――

シカゴの人口
1890 年　1,099,850
1900 年　1,698,575
1910 年　2,185,283
1920 年　2,701,705
1930 年　3,376,438